

心に刺さった脇役の存在

佃典彦

関西に新しく戯曲賞が出来るって！と、噂を耳にしたのは僕がまだまだ駆け出しの頃。とにかく演劇人として箔を付けたい一心で応募したものの、名古屋は関西地区ではないから対象外との報告を受けてガッカリしたのを覚えております。土曜日の昼には吉本新喜劇が放送されているのに、その昔は松竹新喜劇や道頓堀アワーも放送されていたのに対象外とはなんともやり切れない想いで一杯でした。でもよく考えたら名古屋のガスは東邦ガス、仕方ないと納得しました。その後、各地でたくさんの戯曲賞が生まれては消え……そんな中で三十回も続いているのは快挙としか言いようがありません。心して選考会場に向かいました。

『月と首長竜』

タイトルが詩的で内容もとても寓話的な作品です。特に植物人というアイデアに惹かれました。セリフのみで説明されているのが勿体無いと感じました。植物の最大の特徴は〈動けない〉ということ、〈動けない〉にも拘らず太古から繁栄を続けているのは植物の生存への執着とそこから生まれた様々なアイデアです。風や雨などの自然現象、または動物を利用して種子をばら撒いて命を繋げていく。この植物特有の原理原則が植物人の面白味に繋がる気がします。ネッシーの話など興味深い話があったのに勿体無いと感じました。

『灯灯ふらふら～the light is still blinking～』

ここに登場している〈クロス〉は一体何だろう？この疑問がずっと消えませんでした。読み取ることが出来ないまま何度も読み返したという感じです。死を迎えた老年男性のせつなくてこそばゆい記憶の断片で綴られていて、これをおっさん達が演じたら素敵なんだろうと想像しました。どのエピソードもベタなのは意図的なのか、逆に人間の原型が見えてきます。となると、やはり僕の中で強く引っ掛かるのは〈クロス〉の存在です。必ずしも作品に必要ではないのに作風の一つとして出現しているような気もしてきてしまいました。

『さよならの食卓』

この生活感の無さは意図的なのでしょう？作者が伝えたいことを伝えるために登場人物が存在している感じがして人物がなかなか立ち上がって見えてこないのです。不老不死の不死に関する葛藤は描かれているのですが不老に関してもう少し深掘りされていけば良いのにとおもいます。不死は概念ですが不老は現実ですから、そこを突き詰めていけばもっとこの世界に実感を持たせることが出来たと思います。

『みえない』

この作品の中で一番心に刺さったのは主人公・七美の妹の幸香の存在です。謎の現象でおこる暗闇、一個人の暗闇に消えた記憶、そしてずっと暗闇としてまとわり付いて来た記憶、この三つの暗闇の結びつかせ方が上手いと思います。で、この記憶の暗闇のナゾを知っているのは当事者の一子と、この幸香です。一子と七美の二人の物語として描かれている中で、脇に置かれた幸香の存在を設定することで二人の絆がより強く感じる事が出来るように書かれています。最後に七美が一子を探しに行くシーンの七美と幸香とのやり取り、出て行った後の幸香と夫・康彦とのやり取りは一番心に響きました。

『ヒロインの仕事』

一幕は大変面白く読みました。特別大きな事件がおこるワケでもないのに人々の関係性で興味を惹きつけ続ける手腕に舌を巻きました。が、二幕に入って急に話をまとめ出した感が強くなってしまい、物語（ストーリー）に落とし込んでしまったようでとても残念に思いました。今、この世の中で成功とは一体どういうことなのか？何をして人は幸福を実感するのか？というポ

イントに的が絞られていただけに惜しいなという思いです。

『コクゴのジカン』

僕が二十代にバイトしていた会社が世の中の動向の中で倒産の危機に直面しました。レコード針の製造販売として、ほぼ独占企業だったその会社はCDという新製品が現れた結果、あっという間に倒れてしまったのです。その渦中にいた僕はこの作品を読んで本当に驚きました。まさにここに描かれている通りだったからです。誠実で確かなスケッチ力に感服しました。ワンシチュエーションならではの面白さも詰まっています。その場にはいない登場人物のことがキチンと想像出来るからです。各グループごとのシーンから、人物の組み合わせによって事態の深刻さをユーモアを絡めて進めていく構成も上手いです。新型コロナと東日本大震災という二つの大きな災害の中でヒエラルキーを越えて休憩室で語り合う時間はまさにコクゴの時間と言えるのだと感じました。